

# NIGHT DRIVE

written by HADEYA

## 1

前方から来る女は明らかに狂っている。「うう……」と呻き声を上げながらフラフラ接近して来る。避けようとしたが無駄だった。

凭れるようにして、女は彼にブツかった。

「痛ってえな！どこ見てんだよ！」

次の瞬間、目にも止まらぬ速度の右フックが彼の横っ面を撃ち抜き――

## 2

財布の中は温かい。先程、カップルから奪った現金が入っているからだ。

**そう。私の財布は温かい。ホット・コーヒーのように温かい。**

**これだけあれば、二日間は持つだろう。カプセル・ホテルで暮らし、二日後には、もう一度、具合が悪い振りをして財布から金を奪えば良い。**

JR山手線で移動する／路上を歩く――目的もなく／スマートフォンが着信する。見慣れない番号からの着信。不審に思いながら通話に応じた。

「もしもし？」

「金に困ってるんだって？」

スマートフォンの持ち手を変えた。立ち止まり、身体の向きを180°回転させる。

神妙な面持ちで〈私〉は答えた。

「……誰？」

「そんな事は問題じゃない。大そうな報酬のヤマがある。引き受けるのか、受けないのか？」

「受ける」

迷わず、答えた。何故、迷わなかったか自分でも良く分からない。

「仕事内容は？」

「ある家族から金を奪って欲しいんだ。場合によっては手荒な真似も辞さない」

「武器は？」

この時、私は知らなかった。〈連中〉の恐るべき罠に嵌った事を。

そして〈連中〉も知らなかった。私が何者で、何を本業にしているか、を。

### 3

ブランコに乗りながら煙草に火を点けた。不味い外国産の安煙草に。公園を眺める私の視界は遊具で遊ぶ幼子の姿を捉えている。

暫くの間、幼子を見ていた。煙草を吸い終えてもなお、幼子の姿から目が離せずにはいた。

### 4

電車で移動した。我々は一か所に集まった。目的は強盗。状況によっては殺人も辞さない。女子供がいた場合、悲鳴を上げる前に口封する予定でいた。車で目的地に移動し、実行に移した。

\*

目の前には母と娘、二つの死体が転がっている。腹部から大量の血を流し。金を奪った。二千万円——端した金を。私には分からない。この仕事の目的が。私はアングラ組織〈奥村興業〉の従業員だ。誰でも従業員になる事が出来る。奥村興業の賃金は安い。しかし楽に稼げる事から従業員は思いの外、多くいる。言うなれば、奥村興業は人殺しや強盗などを事業内容にする落伍者による落伍者の為の組織だ。給与の支払いは現金取引で事務所で印鑑を手に秋葉原の事務所で行われる。それはアンダーグラウンドで静かに人気を博している。

我々はロクでもない仕事ばかり受ける。今回もロクでもない面々が揃った。自己紹介等を行わないが、目付きで分かる——落ちぶれた者たちの集まりである事が。私もその一員だ。きっと彼等も同じ感想を抱いているに違いない。

奥村興業には、もう一つの側面がある。出会い、だ。異性との出会い。相手の見付からない地位にある我々にとって性欲処理は重要な業務だ。仕事を通じて異性と出会い、行きずりの恋をする。この時も黒川と言う男と知り合った。私たちは狂乱の一夜を過ごした。

### 5

黒川に抱かれる。黒川に嘗め回される。終始無言で、それが当たり前のように私たちは燃えた。相手を貪り、事が終わると、そそくさと別れる。電話番号の交換も行わない。足が付くから、だ。密告されたら溜まったモノではない。

これは後に知った事だが、黒川はプロの殺し屋だった。正確には、元殺し屋。小指の先端がない事から筋者である事は容易に想像が付く。黒川は業界では有名な〈ゼロ〉と呼ばれる殺し屋だった。あらゆる能力を無効化する特異な殺し屋。

その事実を知ったのは翌朝だった。

## 5

セックスは通常、能力交配を目的として行われる。少なくとも私はそう解釈している。愛するからセックスするのでなく、相手の能力を奪う為にセックスするのだ、と。

昨晚も私は黒川の能力を奪った。同時に奪われた——

自分自身の最大の長所である〈冷静さ〉を。

## 6

ラブホテルで目覚めると、既に黒川はいなかった。私は……呼吸が乱れている。鼓動もおかしい。脈を取る。微妙に不整脈だ。意識も希薄で、心ここにあらず。

考えた結果、私はゼロの存在を思い出した。間違いない、黒川は〈ゼロ〉だ。

慌てて財布を確かめる——財布は空っぽだった。良く見ると衣服もない。室内の電話が鳴る。チェック・アウトを告げる電話だろう。

その時、別の着信音が鳴った。聴き慣れない着信音……ベッドの下から鳴っている。無造作に謎のスマートフォンを取り、通話ボタンをフリックした。

「黒川だ。言う通りにしろ」

「……了解」

「隣の部屋に入れ。部屋番号は506号室だ」

「服は？」

「言われた通りにしろ」

言われた通りにした。スマートフォンを手に部屋を出て、506号室に入る。同時に悪寒に囚われた。

私は全身がバラバラになるような奇妙な感覚を感じている。

スマートフォンで私は黒川との会話を続けていた。

## 7

「私に何をするつもり？」

「バラバラにしてやるのさ。加寿子さん、貴女の人生を」

ゴクリと唾を呑んだ。会話を続ける。

「あんたにメカニック完全破壊を仕掛けたんだ、加寿子さん」

「目的は？」

「あんたが何者か知っている」

「嘘ね。そんな訳ない」

「テレビを付けて、チャンネルを変えろ。どのチャンネルでも構わない」

テレビを付け、チャンネルを変えた。そこには幼い頃の私が映し出されている。亡き父と共に海水浴をする私が。場面が変わった———昨晚の強盗殺人の映像に。間違いなく、これは———

「海馬の映像だよ。加寿子さん、あんたの海馬の映像だ。そして、あんたはメカニック完全破壊……つまり〈再起不能〉を受けた」

テレビのディスプレイの映像が青褪めた私の表情に変わる。私はスマートフォンを手にテレビを見ている。ラブホテルの506号室で。

「ここからが見せ場だ。ここから、あんはどうなると思う？」

「お金なら払う」

「断る。二重契約になる。右足を上げてみろ」

右足を上げた。〈何か〉が内膝から入って来た。それが何かは分からない。何か、は神経系統を這いずり回っている。

「こ、これは何？」

「何だろうな？」

何か、が物凄いスピードで神経を突き抜けて行く。「ひっ！」小さな悲鳴を上げ、スマートフォンを落とした。私は……部屋から飛び出た。

## 8

私が何者か話そう。

私は某ラボに勤務する研究者だった。研究内容はアストラル・プロジェクションで被験者は〈私〉だった。

ある時、私は私に最終治験を施す。そして侵入したのだ———このシミュレーション現実には。

最初の内は私は浮かれ、実験の成功を祝っていた。やがて私は致命的な実験エラーを発見する。

シミュ現実にはフルダイブできる事は分かった。しかしシミュ現実からアウトできない事を知ったのだ。つまり私はシミュ現実から永遠に脱出できない訳だ。

勿論、私はシミュ現実からリアル世界へのフルダイブする事も実験した。しかし実験は失敗に終わった。母体……宿主となる肉体が実験の際、死んでしまったのだ。要するに戻るべき肉体がないのだ。

私は戸籍がなくても働ける奥村興業に入社する。そして私はハッカー集団〈シンジ〉に接触する事になる。いざとなった時、私を匿ってくれる集団だ。

メキメキ頭角を表した私はシンジの幹部を経て、ナンバー2に登り詰める。やがてヒットマン……元殺し屋のゼロに抱かれ、全能力を奪われるのだ。

今、私は逃げている。しかし厳密には逃げているのではない。私は———

皮膚の色素を変えた。そうやって別人になる。偽装死は、この業界では当たり前だったりする。

ここまでは普通だ。ここからが普通でなくなる。

シンジの抗争……内紛が勃発したのだ。原因は〈エンティティ〉と呼ばれる物理コンピュータ・ウイルス。リアル世界では物質にも感染する最強コンピュータ・ウイルスが開発され、社会問題となっていた。その矢先に私はシミュレーション現実にインする。

つまり私はシミュ現実におけるエンティティだと言う事になる。

ここに派閥が形成される。私を支持する派閥と、私を排除しようとする派閥。ゼロは私を無効化する為に雇われた元殺し屋で確実に任務を遂行した。

能力を奪われた私は用済みとなり、隔離される事になる訳だ。

## 9

全裸で走る———ホテルを出て、街中を。

石で車の窓を割り、エンジンを直結した。車で逃走する。けたたましい銃声と共に車のバック・ウインドウが割れた。

アクセルを踏む。目一杯、踏み込む。速度メーターがグングン上がって行く。

私は命を狙われている。と思ったら大きな間違いだ。私は狙われているのではない。狙わさせているのだ。

## 10

「どけどけ！」

クラクションを鳴らしながら車が疾走する。前方をパトカー……セキュリティ・プログラムが塞ぐ。車両包囲の突破方法があるとすれば方法は一つ———

そのまま突っ走る事。

ギアをトップに入れ、アクセルを思い切り踏み込む。そのまま車両包囲へ突っ込むと車両は大爆発を起こした。警官の一团がパトカーの背後で退け反る。そして警官たちは見た。爆炎の中から無色透明の流動体が移動するのを。流動体の正体は———

## 11

……何故、私は書くのか。自分でも良く分からない。

けれども書く時、そこにはいつだって熱狂する自分がある。あたかも恋人であるかのように。  
だからこそ私は書く。忘却の連続、失われた日々を取り戻す為、自分自身を見失わない為に。  
狂った世界で理性を保つには、それしかないからだ。

私は彼をそっと抱く。あたかも自分の恋人であるかのように、そっと。ボールペンを手に貴方を抱く。  
そこに私は活路を見出す。書く事しか能のない人間の屑だからだ。  
抱きながらキスを交わす。電気の迸る最高のキスを。燃えるよう、熱烈に。

そう、これで終わり。これで一巻の終わり。  
そして再び旅に出るんだ。見果てぬ夢を求め、センセーショナルな熱狂を求め。

燃えていた、あの頃を思い出す。かつての自分。あの頃、私は夢中だった。貴方に夢中だった。  
今、私はこの場を去る。そして再び歩み出す。未知の大地——キングダムへ。そこで殺戮の限りを尽くすの。最  
高、高揚、続くのはチリチリ焦げる暗い情念。

それでも人生は続く。時として優しく、時として激しく。そう。それでいいの。

## 12

路地裏でボールペンを突き立てた。〈奴〉の首に。枯渴、と言う名の化け物に。ざまあみやがれ、阿呆丸出しのイカ  
サマ野郎め。

そこへパトカーが駆け付ける。警官に取り抑えられ、狭いパトカーに押し込まれる。  
その時の景色を記憶に焼き付ける。夜の東京を。自分の故郷を。その光景は余りにも美しく、余りにも切ない。

私は感じる——美を。生きる目的を。ダイナミックかつ、しなやかに。それが答えだ。  
今、私は完全に自分を取り戻した。夜の景色に思いを馳せ、かつての熱狂を取り戻す。私は——

移ろい行く街の景色から目が離せずにいた。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号  
三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872